

平成25年度 清水町教育委員会の活動状況に関する 点検・評価報告書

点検・評価の概要

教育委員会は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律により、毎年、事務の管理・執行の状況について点検・評価を行い、その報告書を議会に提出するとともに公表することが義務付けられています。

また、その際、客観性を確保する観点から、教育委員会以外の学識経験者による知見の活用を行うこととなっています。

清水町教育委員会としては、この点検・評価を、本町の教育資源を有効活用し効果的な教育行政の推進を図るための確認の機会であると捉えるとともに、住民への説明責任を果たすことができるように進めていきます。

評価対象は、年度当初に示す教育行政執行方針に基づき実施する事務事業のうち、本町の教育行政として特色ある事務事業としました。

また、点検・評価報告書の作成にあたっては、選定した事務事業の推進状況を自己評価し、外部知見の活用として学識経験者から意見をいただき、今後の教育行政に活かすこととしています。

なお、報告書は毎年度議会へ提出し、公表します。

学識経験者として、北海道教育庁十勝教育局及び前社会教育委員長からそれぞれご意見をいただきました。

点検・評価した項目

清水町の教育行政の中で特色ある事務事業として次の7項目を選定しました。

- 町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進
- 全国学力・学習状況調査の結果を受けての取組
- 就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進
- 「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取組
- 生活習慣を身につける生活向上推進事業
- 地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣事業
- 子どもたちへの読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進

現状と成果

清水町教育理念「心響」～打てば響く 心に響く～を基軸として、「心を通わせ、互いに響き合う感性豊かな教育の推進」を目指し、実践指標 “しみず「教育の四季」” を平成18年4月に宣言してから8年になりました。以来、家庭・学校・地域が連携して、「あいさつ、返事、後片付け」「早寝、早起き、朝ごはん」など、主として子どもたちの基本的な生活習慣の定着を図るための取組を展開してきました。本年度についても、4月に推進協議会を開催し、前年度の実践の成果と課題を踏まえた中で、町民が一丸となって子どもたちを守り育てる“しみず「教育の四季」”の取組を推進しました。

本年度の主な具体的な取組としては次のとおりです。

4月に「教育の四季」リーフレットを町内小中学校及び保育所・幼稚園を通じて家庭に配布する。本年度は幼稚園・保育所版の「教育の四季」リーフレットを作成し配布する。感性豊かな子どもの成長に読書は欠かせないものと考え、町民が読書に親しむ環境づくりの一環として、毎月19日を「しみず読書の日」として5月に制定し、読書活動の啓発に努める。中高連携としてのサイエンス・サマースクールを開催する。「子どもフォーラム」を開催し、町内小中高の児童生徒による「あいさつ、読書」についての意見交流を行い、各種団体代表者からの指導・助言を受ける。町内各保育所や幼稚園の保護者参観日に「教育の四季」の趣旨や取組について説明し、就学前教育の重要性について周知する。町内保育所、幼稚園、小中高から「ちょっといい話」を集約し、各所属所へ配布するとともに町のホームページに掲載し、清水町の幼保小中高の取組を積極的に発信する。

今後の課題

- ・子どもたちの実態として 家庭での読書の時間が少ない 家庭学習の時間が少ない テレビ・ゲームの時間が長い 身の回りの整理整頓が苦手とする子が多いことがあげられます。家庭学習の習慣化や読書の時間の確保については、家庭と学校の連携を取りながら定着を図る必要があります。
- ・町民総ぐるみの教育活動を展開するために、各町内会組織及び各種団体等への浸透を図っていくことが大切です。
- ・地域、学校、家庭が互いに協力し合い、子どもたちを守り育てるという共通の目標と一連の活動の評価と情報をみんなで共有していくことが大切です。

今後の対応策

- ・“しみず「教育の四季」”の町民全体への浸透を図る取組に努めます。
- ・第8回「子どもフォーラム」を実施します。町内各小中学校児童会・生徒会及び高等学校生徒会の“しみず「教育の四季」”の取組を発表するとともに、各種団体代表者等からの意見を聞き、今後の方向性を明らかにします。
- ・学校を基軸として、保護者と地域住民が相互に協力し合える体制づくりに努めます。そのためにも清水町の幼保小中高の取組を積極的に発信していきます。

学識経験者の意見

幼児期の生活リズムの確立を図る幼・保版「教育の四季」や豊かな心を育む「読書の日」の取組など、「生きる力」の基礎を培っており評価できます。

今後は、幼稚園、保育所、学校、家庭、地域が子育てに関する課題を共有するなど、地域が一体となり子どもを育てる取組の一層の充実を期待します。

教育の四季の基本的な考え方は、保護者や地域住民に当然のことながら本来、大切にしなければならないこととして受け入れられ、確実に定着し、広がりを見せております。子どもフォーラムの実施は、この広がり大きく貢献していると思えます。続けて実施すべきと考えます。

全国学力・学習状況調査の結果を受けての取組

現状と成果

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、小学6年生及び中学3年生の児童生徒を対象とする全国学力・学習状況調査が国語と算数・数学の2教科で4月24日に実施されました。本年度は悉皆調査で、本町の全小中学校が実施しました。

文部科学省は8月27日にその調査結果を発表しましたが、本町における教科に関する調査（国語、算数・数学）の平均正答率は、小学校・中学校とも北海道及び全国平均を上回ることができ、多くの児童・生徒が概ね学習内容を理解し、全体的に基礎・基本の定着が図られ、それを活用することも身に付いているようです。

しかし、調査結果から指導改善の必要な課題が見られ、なお一層、指導の工夫・改善等を図る必要がありました。また、学習状況に関する調査では、全国に比べ基本的な生活習慣が定着している傾向にありました。

これらの調査結果を踏まえ、教育委員会として学力向上支援プランを作成し、町のホームページで公表しました。また、各学校に学力向上支援プランを示し、各校においても調査結果を生かした今後の指導について具体的方策をまとめ、保護者にお伝えするとともに、放課後や夏冬休みの学習機会の確保など学習支援の工夫をしたところです。

今後の課題

- ・本調査で測定できるのは、一部の学年と学力の一部ではありますが、調査結果を受けて各学校で学力・学習状況を把握・分析して、教育の成果と課題を継続的に検証し、学習指導の工夫・改善に役立てていく必要があります。
- ・本町は家庭での学校の授業の予習・復習について、小学校と中学校とも「している、どちらかといえばしている」と回答した児童生徒が全国や北海道に比べ多い傾向にありました。基本的な生活習慣が身に付いて、自尊意識・規範意識が高く、学習に対する関心・意欲のある児童生徒については、教科に関する調査の正答率が高い傾向にあります。このことは、これまで取り組んできた小学校低学年の少人数学級、幼保・小連携の施策や“しみず「教育の四季」”などの実践が影響していると考えられるので、それらの施策の継続が必要となっています。

今後の対応策

- ・各学校との連携を図るとともに、小学校低学年における少人数学級の継続、幼保・小連携を重視した就学前教育の充実を推進し、児童生徒の学習意欲を高めるための学校の取組を支援していきます。
- ・規範意識の向上による学習習慣の確立や、基本的な生活習慣の育成を図り、学びに向かう姿勢の向上のため、“しみず「教育の四季」”の普及啓発を推進します。
- ・教員の資質向上については、学校教育課教育指導幹の学校訪問、外部講師の活用、十勝教育局指導主事派遣の要請、地域の人材による学習指導に関する支援体制を工夫していきます。

学識経験者の意見

学力向上支援プランによる授業改善や小学校における少人数指導など、子どもの学習状況に応じた指導の充実を図っており評価できます。

今後は、全国学力・学習状況調査結果を踏まえ、家庭・地域と課題や改善方策を共有するなど、地域と一体となった学力向上の取組の一層の充実を期待します。

学力の調査結果を分析、検証して、指導の改善に役立てようと、努力している姿が見られます。

意欲的に取り組む子どもたちの姿を想定し、地域の教育力を活用して更に向上することを期待したいと思います。

就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進

現状と成果

平成15年度に「特区」を活用した小学校低学年における20人程度の少人数学級を具現しました。これは、生活集団と学習集団の一体化の中で、規範意識や躰、マナーの日常化を図るきめ細かな学習環境を整備するものでした。

その理念の延長線上に、就学前教育の充実の必要性を強く感じられたことから、町内の幼稚園・保育所と小学校のなめらかな接続を図るために、教育課程と保育計画とのつながり、教師と保育士との連携と研修、幼児と児童の学びと遊びの交流などの視点から調査・研究を進めました。

調査・研究は、平成17年度から2ヵ年、道教委の委託を受けて、理念と実践とを指導機関の協力のもと進め、平成19年度以降は調査研究事業の成果と課題を踏まえ、無理のない範囲で幼保・小のなめらかな接続を図る取組を継続実施しています。

具体的な取組は、清水地区と御影地区の2ブロックに連携推進会議を設け、幼児と児童の交流はもちろんのこと、教師と保育士との交流及び研修を通して互いに指導・援助の違いなどの共通理解を図り、発達や学びの連続性を重視した活動を行っています。

平成25年度は、ブロックごとの推進の協議、授業参観、児童と年長児の交流、職員間の交流、研修会の開催など昨年同様、積極的に実施しました。また、この取組が、更に小学校と中学校、中学校と高校との連携に発展しています。

今後の課題

- ・基本的な生活習慣や思いやりの心をはぐくむ教育活動を幼稚園・保育所、小学校が同じ目線で一貫した取組をしていくことが大切であり、教師と保育士との情報交流や相互理解を図るためにも幼保・小連携の継続的な取組が求められています。そのために、連携の取組を継続することの重要性を全体で認識し、交流活動のねらいや方法について改善を重ねていくことが大切です。
- ・連携を図るためには、保護者や地域の理解や協力を広めることも必要となります。

今後の対応策

- ・新しい保育所保育指針や幼稚園教育要領、小学校学習指導要領においても幼保・小連携が明記され、今後も重要な課題として位置づけられました。道内においても先進的な取組事例として高く評価をいただいているところですが、無理なく継続することが大切であり、清水町幼保・小連携協議会では連携の柱となる骨格を協議し、実践面の取組は各ブロック推進会議で担当教員を中心に連携を推進していきます。
- ・平成23・24年度で作成した、幼稚園・保育所でのアプローチカリキュラム、小学校でのスタートカリキュラムの活用を図ります。
- ・幼保・小連携推進会議の便り「つらなり」を町内に回覧し、活動内容を発信していきます。

学識経験者の意見

幼保・小連携協議会の下、スタートカリキュラムやアプローチカリキュラムを作成するなど、組織的、計画的な取組を推進しており評価できます。

今後は、カリキュラムに基づいた実践を進め、合同研修会で成果や課題を検証するなど、幼保・小が一体となった取組の一層の充実を期待します。

幼保・小の連携は、極めて大切です。特に保護者の交流が重要だと思います。小学校の教育は、幼保と違って、国民の三大義務 - 納税・勤労・教育 - のひとつで、保護者の責任は極めて重いのです。この認識をきちんともってもらう必要があります。

「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取組

現状と成果

食育については、「おいしい笑顔が見える給食」と「考える給食」を合言葉に、毎月発行の「給食だより」で、給食を通して児童生徒に正しい食事の取り方や望ましい食習慣を身に付けさせるなど、食に関する指導の充実を図るとともに、地元産の食材を多く利用したメニューを取り入れています。

また、給食センターに隣接する試験ほ場を整備し、栽培した野菜を小学校児童の給食センター見学の際に収穫体験させ、実際の給食に使用しました。さらに、学校における食育を推進するため、平成25年度第1回北海道学校給食調理コンクールに清水町学校給食センターチームとして参加し、衛生管理と調理技術について優秀と認められました。コンクールに出品した給食メニューについては、北海道教育委員会のホームページの中でコンクールのレシピとして紹介され、内外に食育の情報を発信しました。

なお、独自メニューとして次の取り組みを行っています。十勝清水の恵み給食～清水産の食材を使ったメニューとすることで、町内ではどのような食物が生産・加工・販売されているのかを理解することに役立っています。全国学校給食週間特別献立～小学校6年生児童が考えた献立を、全国学校給食週間の一環として実際に提供しました。家庭科授業と連携した取り組みにより、黒大豆などの地場産物と町内生産者への理解が深まり、給食献立作りへの子どもたちの関心も高まっています。バイキング給食～小学校6年生、中学校3年生の卒業を祝うため実施していますが、継続を待ち望まれています。

今後の課題

- ・共同調理施設は、現施設が平成9年度に整備されてから17年を経過しており、調理設備の故障や器具・備品の傷みが激しくなっており、衛生管理面からも適切に設備や備品の更新を図っていく必要があります。
- ・全国的にノロウイルスなどによる食中毒事件の発生で、従来以上に安全で安心な給食提供が求められています。

今後の対応策

- ・地産地消の推進のため地元農業者等の連携を継続するとともに、地場産物を活用した献立を給食提供し、町内生産者への理解につながるよう児童生徒の興味関心を高め、感謝の心を養います。
- ・試験ほ場の収穫物を給食に活用することにより、野菜について考える給食を実践し、野菜をおいしく食べる工夫を図ります。
- ・既存の独自メニューを継続します。

学識経験者の意見

栽培した野菜の収穫体験や地産地消のメニューの開発など、子どもの地場産品への興味・関心を高める取組を行っており評価できます。

今後は、食に関する指導の全体計画を作成するなど、計画的に望ましい食習慣を身に付ける取組の一層の充実を期待します。

地産地消の推進の中で、子ども達と地元農業者との交流を企画し、生産者の苦勞を理解することで、感謝の気持ちを育み、それが郷土愛につながることを期待します。

生活習慣を身につける生活向上推進事業

現状と成果

家庭におけるライフスタイルの変化により、人や社会との関わりが子どもに不足し、生活体験や自然体験の豊富な子どもほど、道徳観や正義感が身についているといった調査結果が出ています。

このようなことから、児童期に「早寝、早起き、食事、後片づけなど」の基本的な生活習慣を保護者に理解してもらうことが重要であると考え、事業を実施しています。

本年度は7回目の開催となり、昨年の事業反省をふまえ、清水小及び御影小に直接依頼した結果、清水小から8名、御影小から3名の申し込みがありました。

指導者は、職員7名と協力スタッフとして、町女性団体連絡協議会、町更生保護女性会より22名のご協力を頂き運営を行いました。

子どもたちはモデル的生活リズムでの生活により、普段体験することの少ない家事全般を体験し生活することの苦労を実感し、家族（お父さん・お母さん）のありがたさを感じたようです。

今回の通学合宿には昨年から継続して4名が参加し、初めて参加する児童の良き模範となり、生活習慣に対する知識と経験を仲間とともに実体験することで更なる成果が得られたと感じました。

また、研修終了後の保護者へのアンケート調査からは、普段の生活リズムの反省と改善意識が見られ、家庭教育事業として、効果が見られました。

今後の課題

- ・通学合宿事業の成果が達成されていることから、今後は体験事業を見直し、啓発事業へのシフトが望ましいと考える。

今後の対応策

- ・参加した児童が習慣化できるよう、保護者の理解と子どもの生活リズムの重要性をアピールする啓発を行ないます。

学識経験者の意見

多くの地域住民と共に参加者の生活体験活動や生活リズム向上の取組など、保護者の生活リズムに対する意識向上が図られており評価できます。

今後は、啓発事業への移行に当たり、子どもの生活リズム向上へ向けた学習機会の提供を行うなど、家庭と課題を共有した取組の一層の充実を期待します。

子どもたちが、昼間は一杯勉強し、たくさん遊んで、夕食を食べたら眠くなるような生活が望ましいと思います。

大人と同じような生活スタイルではなく、本来の子どもの生活リズムを取り戻したい。

そのために、通学合宿事業は重要な役割を果たしていると期待できます。

地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣事業

現状と成果

町民のボランティア意欲をまちづくりや生涯学習活動に活かす「生涯学習ボランティア登録・派遣事業」を平成14年度から実施しました。

この事業は、個人が仕事や趣味で得た知識や技術を町民の学習活動に還元したいという方や、教育事業や教育施設に対して貢献したいという方を登録し、学習講師や活動支援として求める町内の団体・組織に派遣します。この学習成果の還元と人と人を結びつけることにより、互いに学び合える町づくりを促進することをねらいとした事業です。

社会教育分野での派遣要請は僅少ですが、芸術分野等の専門性が求められるボランティアに対しての要請がありました。

登録者は、芸術文化やスポーツ、教養などの分野で55名おり、学校教育活動に対する支援者が多くを占めました。

活動分野と活動者が年々固定化してきているため、ボランティア活動が社会から評価されるよう広報誌を活用し、事業PRとボランティア活動の活発化につとめました。

このように、生涯学習ボランティア事業による町民の学習活動に対する支援の仕組みを構築した成果であり、協働の町づくりが着実に推進されている表れであります。

今後の課題

- ・継続したボランティア活動を活性化するためには、活動者や学校等の負担軽減と活動における調整者と手当てが必要です。

今後の対応策

- ・ボランティア意識を高めるために、活動が社会から評価される広報をします。
- ・ボランティア活動の活発化に向けて、職員による調整を充実させます。

学識経験者の意見

町民の学習活動に際し、学習したい人と学習の成果を還元したい人を結びつける活動など、学び合える町づくりを積極的に行っており評価できます。

今後は、多くの町民にボランティアへの参加意欲を喚起するよう、本事業の広報の工夫、成果の発信など、ボランティアの拡充に向けた取組の一層の充実を期待します。

生涯学習ボランティア事業は、これからの町づくり、地域づくりに極めて重要と考えます。

広報などで、PRに努めるとともに、町内会などにも協力を要請したらよいかと思えます。

子どもたちへの読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

現状と成果

図書館の読み聞かせボランティアとして平成4年に結成された「五月会」の会員は現在6名で、毎月第2・第4土曜日に図書館で行うお話し会のほか、小学校・幼稚園・保育所での公演依頼に応じており、安定した活動を行っています。

7月、12月に行った特別公演は、小学生が読み手として参加するイベントとして特に来場者に好評でした。[平成25年度お話し会(12月末現在)15回開催、延べ234名参加]

今年度は、新たな事業として、図書館と五月会の共催という形で、「絵本カフェ」と題して家庭での読書につながる講演会や絵本に出てくるおやつを実際に作る体験付きお話し会も行いました。

今後の課題

- ・「五月会」は安定した活動をしています、会員の高齢化が懸念されます。新たな読み手の育成が今後の課題です。

今後の対応策

- ・引き続き、読み聞かせ用の資料、情報提供などの活動支援を行います。
- ・新たな読み手の育成につながる講座を継続して行うことで、潜在ボランティアの開拓につなげていきます。

学識経験者の意見

小学生が読み手として参加する特別講演や絵本カフェの取組など、多くの世代が読書を身近に感じる取組として評価できます。

今後は、既存のサークルの活動の充実や新しいサークルの立ち上げを促すなど、ボランティア拡充の取組の一層の充実を期待します。

読み聞かせボランティアについては、各学校に協力を要請し、PTAにも話しかけてもらったらどうかと思います。

若い保護者の中には、関心をもった人がかなりいると思われます。きっかけが掴めないのだと思います。